第23回 子どもの福祉と児童クラブ ―学生のSDGs視点から

行方市SDGs推進アドバイザー・茨城大学教授　野田 真里

1．「子どもの福祉」をテーマに、行方市SDGsフィールドワーク2022を実施

去る8月19日、私の研究室の学生11名とともに、行方市SDGsフィールドワーク2022を「子どもの福祉」をテーマに実施いたしました。麻生庁舎でのブリーフィングに続いて、放課後児童クラブ（以下「児童クラブ」）玉造キッズにてボランティア活動をさせていただきました。ご対応・ご尽力をいただきました、永峰副市長、政策秘書課、こども福祉課および関係各位に心より感謝申し上げます。

市の総合戦略（改定版）にもあります通り、人口減少・高齢化への対策は喫緊の課題であり、子育てへの取り組みが重要と考えられます。僭越ながら、以下、SDGsや地域課題について学ぶ若い学生の視点から、フィールドワーク・ボランティアを通じて見聞し、感じた考察を、皆さまへのフィードバックとしてご紹介させていただきます。ご参考になれば幸いです。

2．子育てにおけるコミュニティと「第三の居場所」としての児童クラブ

行方市の児童クラブには市内4つの小学校（麻生、麻生東、北浦、玉造）に通う児童1353名のうち、486名の児童が登録しているとのことです。これは、児童の約36％にあたり、行方市では共働き世代が非常に多い点に鑑みると、一見、割合としては少ないようにも思えます。その背景には、地域や祖父母が子どもたちの面倒を見る体制が整っている点が考えられます。他方、児童クラブでは、臨時の利用等のニーズには柔軟に対応しているとのことでした。

行方市では、コミュニティで子どもを育てる伝統とともに、いざという時には児童クラブに子どもを預けることができる、という安心感があり、児童クラブが子供達にとっての家庭、学校とならぶ「第三の居場所」（サードプレイス）として機能していると思われます。行方市の人口対策と子育て世代の移住・定住促進に向けて、こうしたコミュニティの機能と、これを補完する児童クラブについて、より一層の連携強化と情報発信が必要と思われます（4年生、女性）。

3．業務委託型の児童クラブと課題

行方市の児童クラブは、全国に先駆けて業務委託型を導入した点が特徴的です。受託事業者は「私たちは、誰一人取り残されない未来への希望を育み、今日を支えます」をその思いとしており、SDGsへの親和性が高いと思われます。玉造キッズでは「子どもたちの家庭環境や地域とのつながりを大事にした育成」や「鍵っ子をつくらないことで、親の働きやすい環境と子どもの健やかな成長を促進する」との方針で運営されているとのことでした。

実際に子どもたちと接する中で、学年の大きい子が小さい子を助けるなど自主性や社会性が育まれ、健やかな成長ができる環境が整っているように見受けられました。他方、課題として、業務委託により、市が直接運営する場合よりも利害関係者が多岐に及ぶことから、市、学校、保護者・コミュニティそして運営会社の間での一層のコミュニケーションや連携が必要であると思われます（4年生、女性）。

▶茨城大学野田研究室の学生が、玉造キッズでボランティア活動（筆者撮影）